

---

# 靴飛ばし

鋺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

靴飛ばし

### 【Nコード】

N4137H

### 【作者名】

鋈

### 【あらすじ】

ほんのわずかな時間。二人は過去を振り返った。時によって隔てられた距離。僅かでも分かち合えた気がして彼らは笑った。

## （前書き）

前に投稿したものを書き直して投稿しています。

靴飛ばし

静かな夏の夕方、近くの神社に寄ると、数人の子供が遊んでいた。神社に続く坂を下っていくと、目の前にありあまるほどの緑が目に入る。それが夕焼けで紅色に輝いていた。上空を見上げると、昼間は真つ青で雲ひとつ無い晴天だったのが、今は大量に林立している杉の葉の隙間から、眩しく鈍い光がこぼれている。西の空にはグレイ色の雲が立ち込めていて、それがまた奇麗に見える。

先ほどの子供達のせいか、神社のすぐとなりにある公園の水飲み場の蛇口から、微かに水がこぼれ落ちている。子供の頃は、ここでよく遊んだものだ。全身泥だらけになりながらも、日が暮れるまで遊んでいた。しかし、最近は遊ぶどころか、立ち寄ることもほとんどない。

紗春は公園のブランコに腰掛けた。近くのベンチに中身がこぼれないうちにと、そっとコンビニの袋を置いた。近くにキリギリスが一匹止まっている。しかし紗春は、それに構う余力もなく、ゆっくりとブランコを漕ぎ出した。こんなに穏やかな気持ちになれたのは久しぶりだ。

それから、どのくらい漕いだのか。水飲み場の蛇口からは水が、未だ止まっていなかった。溜め池に流れる水の断続的な音とリズムがあたりの、静けさを際立てていた。もうキリギリスがどこかへ行ってしまった。コンビニの袋の中身がこぼれたのも気にならなかった。ここにずっと居られたらと思う。そしたら、嫌なこと全部忘れられる。

紗春はそれから数分間、その場で座り続け、ブランコの手すりが少

しばかり、冷たくなってきたのを感じた。夕焼けはまたたくまに、暗闇に変わりつつあった。紅色だった杉の葉は、だんだんと黒味を帯びていった。

紗春は立ち上がった。コンビニの袋の中身を片付けるためだ。行きかけの駄賃に水を止めた。断続的な音とリズムが消えて、あたりは静まり返った。

紗春は帰るときおつかいのお釣の少しを使って、お参りをした。古ぼけた茶色の建物には、赤褐色のさびや無数の苔がこびり付いている。お参りをするには、少し小さく陰気な建物である。そもそも年始にも、ここに立ち寄らない。もっと大きな神社に参拝しに行く。紗春が神社の石段を降りていくと、さっきまでの子供の声がした。もう暗くなるのにどうしたことかと思いつつも、紗春はゆっくりと帰り道である、声のする方へ歩んでいった。

「もう帰るのか？」

「もうちょつと居たいけど、今日は帰らなきゃ」

「そうか。またな、尚美」

子供達だと思っていたが違って、二人の男女だった。暗くなっている女の人影のシルエットが、公園の方へ向かっている。尚美と呼ばれたその女性は、男に手を振っていた。男は見送っているらしく、その場で手を振っていた。その時始めてその男は、ずっと黙って見ていた紗春に気付いた。

「お、中川…だよな。どうしたんだ。こんな所で」

「え、ああ。お参りをしていただけだよ」

男は制服姿で大きなバックを担いでいて、野球帽を鞆からぶら下げていた。

「おつかいの帰りにね、この神社に寄ったの。ねえ、駿ちゃん、今のは駿ちゃんの彼女？」

駿は紗春の小さい頃の幼なじみで、よくこの公園で遊んだ友達の人だった。背丈は紗春よりも少し大きくなっていて、頭は丸刈りであつた。頼もしい黒々とした日焼けの跡がある腕が見える。彼とは学校も違い、会つのは三年ぶりだった。

「ああ」

少し力なく駿は答えた。

紗春はさっきまでの穏やかな気持ちはどこかへ行ってしまった。それとは別に、懐かしさやさみしさを感じていた。

日はだんだんと落ちていき、静寂をもつと際立たせていた。杉の木が風に吹かれてざわめいている。杉の木の根元から黒々としたものが浮かび上がってきた。風で杉の木がなびき、紗春達を拒んでいるようだった。

「ねえ、ブランコ漕ぐ？」

外灯のない暗い夜の中に二人はいた。日はもう完全に沈んでいた。変わりに三日月の光が、微かにあたりを薄く輝かせていた。ブランコの冷たさは増していた。紗春はさっきのような気持ちで漕いでいたが、駿がどうなのかはわからない。同じような気持ちなのか、それとも漕ごうといわれて、しかたなく漕いでいるだけなのか。駿は大きなバックと野球帽を例のベンチに置き、ワイシャツを制服のズボンから出して、ブランコの手すりを腕で抱え込むようにして、無言のまま少しだけブランコを前後に移動させていた。

「駿ちゃんよくここで靴飛ばしあつて勝負していたよね。駿ちゃんすぐとんでいたじゃない。私なんかぜんぜん飛ばないから駿ちゃんにコツを教えてもらったのに、ちっとも上達しなかったよね」

「駿ちゃん、靴を上には飛ばしすぎて、木に引っ掛かつて近くの家から梯子借りてきて、とつてもらったこともあつたよね」

無理に明るい口調で語り掛ける。

それでも、駿はずっと下を見つめ、ただ軽く相槌を打っただけだった。彼の視線の先には先ほどのものなのか、それとも違うものなのか、キリギリスが一匹立ち往生していた。

「このキリギリスね、さつきもここにいたんだよ」

いつの間にか、この沈黙が安らぎではなく気まずさに変わっていた。沈黙が流れた。

前方のキリギリスは二人の気持ちはよそに、静かに鳴き始めた。

突然強い風がまた吹いた。冷たい風に半そでにスカートの紗春には少し肌寒く感じていた。キリギリスの鳴き声が聴こえなくなる程の風だった。二人の間を風が通り抜け、神社の鐘が不気味になりだした。

その時彼は突然言った。

「中川、靴飛ばしやろうよ」

彼は恥ずかしそうに下を向いていた。その顔は赤らんでいるようだった。その顔を見て、紗春は駿もさっきの紗春と同じような気持ちになっていたのだということを悟った。

「うん」

予想通りだった。今も運動部に所属しているためか、駿の腕前はまったく衰えていなかった。彼の靴は大きな弧を描いて滑り台の向こう側に落ちた。対する紗春は駿の半分にも満たなかった。水のみ場のすぐ前に落ちたのだ。昔は何回も飛ばしていたのだが、今日は一回きりだ。それは暗いからではなかった。

二人は再びブランコに座った。

「また駿ちゃんに負けたね」

紗春は自分の顔が赤くなっているのに気付いていた。駿はすましていたが、確かに二人は同じものを共有した。

「さみしいね」

紗春は少し間を置き言った。

「ああ」

駿は頷き、言った。

何かの決心をし、紗春は勢いよく立ち上がった。

「じゃあね、駿ちゃん」

紗春はその場で別れをした。風の冷たさもギリギリスも駿も、もう気にならない。紗春はコンビニの袋を持って思いっきり走って家に帰っていった。

「じゃあな」

と一人呟き、駿も野球帽とバックを担ぎお参りをするために神社に向かって歩いていった。



（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

何かしら心に残ったものがありましたら、コメントしていただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4137h/>

---

靴飛ばし

2010年10月12日19時38分発行